



石川 宜介

『平和の鐘 ピョンチャン オリンピック』

夕食後ぼんやりとテレビを見ていた、間もなくピョンチャンオリンピックの開会式かな？画面が少し騒がしくなった、カウントダウンが始まったようだ。「あれ？朝鮮鐘だ！」会場の中心に突然出現した青く輝いた梵鐘に驚きました。コンピューターで作られた画像か？実物かは判断出来なかった。この鐘に向かって明るい光が高速で衝突、その時。『ゴーン』と厳かな音色が響き、華やかな花火が上がりアトラクションが始まった。



テレビ画面

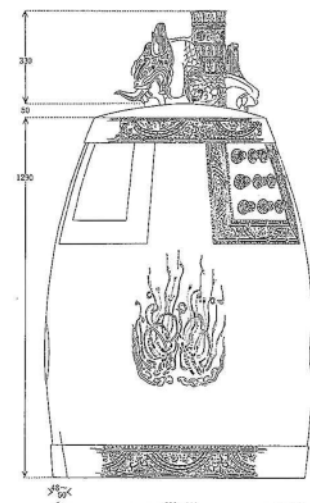
オリンピックは「スポーツと平和の祭典」。そう思っていたが、政治色があらわに出て興味をそがれています。特に韓国と北朝鮮の、アイスホッケー女子の合同チームは35人と他のチームより人数が12人多くなっていて公正を欠いています。北朝鮮の応援団は250人以上、（選手は約22人）楽団派遣など五輪に乗じた「ほほ笑い外交」で、韓国世論の軟化を図ろうとしています。また、組織的なドーピングが認定され資格停止処分を受けたロシアは、個人資格で「ロシアからの五輪選手（OAR）」として、五輪旗を先頭に入場行進した。寂しいことです。



上院寺の銅鐘

開会式の翌日、「平和の鐘」のことを調べました。あの鐘は平昌郡にある名利・上院寺（サンウォンサ）の梵鐘で、開会式の定刻に鐘が鳴らされたそうです。この鐘は現存する韓国鐘の中で最も古く美しく、新羅 聖徳王24年（725）に鑄造され、朝鮮睿宗元年（1469）に上院寺に移されたもので、韓国鐘の固有の特性を全て備えている代表的な梵鐘です。

坪井良平の著書「朝鮮鐘」には以下の様に記されています。鐘は通高 167cm、口径約90cm。その鐘身の最大径は下端口唇の部分ではなく、下端から約3分の1の高さのところであって、口唇で若干すぼまっているが、このような外曲線を呈することは高麗時代に至っても持続される大多数の朝鮮鐘、鐘身の基本的な形状である。（中略）



奏楽天人像

『朝鮮古蹟図譜』に「其形態の美なる、竜頭の彫刻の雄渾なる、双飛仙の優雅なる、撞座文様の繊麗なる、実に当時芸術の驚くべき発達を表白せる者にして、特に肩帯、口帯、乳郭には処々欠円内に天人を現わし、間地に草花文を刻せるは最も技工の洗練せるを見る」と激賞しているが、決して過褒ではない。



参考資料

上院寺 銅鐘 国宝第36号 平昌郡

<http://krruins.cho88.com/gangwondo/pyongchang/pg393.html>

毎日新聞2018年2月10日 東京朝刊

「朝鮮鐘」坪井良平 角川書店 昭和49年 7月

『鉄のふしぎ博物館』

来て！見て！ふれて！ ふしぎ体感